

白砂青松再生の会お便り NO. 27

このお便りは日本の海岸林や広葉樹林をはじめ、世界中の森林が、今どれほど傷んでいるかをみなさんに知っていただきたいと思って、うるさがられることを承知の上で書いています。お邪魔になるようでしたら、ご遠慮なく消してください。また、メールアドレスが変わってからご連絡のない方は、自動的に名簿から消えますので、あしからず。しばらく、外国事情の報告が続きましたので、それ以後の国内のことをご紹介します。

9月21, 22日 島根県へ

出雲空港からそのまま島根大学の医学部の前にある築地松（ついでまつ）を見に行きました。最近、予算と手入れ不足のために枯れ始め、出雲土建さんが大学の方から何とかしてほしいという依頼を受けました。何とか予算の見込みがついて、出雲土建が請け負い、樹木医の佐藤さんや榎野さんが担当することになりました。私は2010年3月に出かけて作業に立ち合い、そのひどい状態に驚きました。

地表は草ぼうぼうで、土が黒くなっています。弱ってくると植木屋さんが肥料を撒くのか、クロマツが肥満して幹が異常に太く、樹高も高くなっています。細い根が紐のように伸びて行き場がないため、絡み合ってもつれた毛糸玉のようになっていました。細根は死んで、大半黒くなり、もちろん菌根はありません。

肥えた表土を完全に除き、太い根以外ほとんど切り捨て、炭の粉を入れてもらいました。リン酸肥料とコツブタケの胞子液の使い方はいつもと同じです。根を切ったので、地上部も思い切って剪定し、枝葉を3分の1ほどにしてもらいました。

6か月では、まだ効果が出るには早いかないと思いましたが、枯れた木はありません。中には枝の先が上を向いて伸び出したものもあり、葉の色も多少鮮やかになっているように見えます。まあ、どうやら持ちそうなので、ひと安心。

根を掘り出してみると、白い主根が伸びて、ちゃんと菌根がついていました。数か所探ってみましたが、ほぼ大丈夫です。樹齢20年ほどの若い木ですから、反応が速いのでしょう。これは、最近庭園木で増えている肥満木の典型的な例です。

その夜はホテルで開かれた「浜山を守る会」の発足記念パーティーに参加しました。出雲市の浜山地区ではNPOや自治会を中心に、市や県の支援を受けてマツ林再生の活動を始めることになり、2010年の秋に「浜山を守る会」が発足しました。

前にも紹介したように、ここは江戸時代につくられたクロマツ防砂林の典型的な例といえます。砂が動いて農地や人家がたびたび埋もれたために、江戸時代の篤志家、井上恵助さんが私財をなげうって、この大きな砂丘に四万本ほどのクロマツを植えました。運動公園や自衛隊の駐屯基地など、周辺の開発が進んでマツ枯れが広がったため、恵助さんが植えた樹齢250年以上の木はほとんど残っていません。ただし、人があまり入らない南端の方には、幹の曲がった老木が昔の姿をとどめているので、ぜひ残してほしいとお願いしました。退職後Uターンした方が、熱心に管理をしておられます。

薬剤に頼る安直な対症療法だけでなく、井上恵助さんのように息の長い奉仕活動が必要なのです。みなさんの善意で「こでかき（落ち葉かき）」が進み、きれいなマツ林が保たれることを祈ります。きっと、全国に通じる良いモデル林になると思います。こんな運動が始まると聞くと、つい嬉しくなって飲みすぎ。毎度のことながら、いつも「この悪癖のなかりせば」と反省することしきり。

翌日は太田市の「定め松」の検討委員会に出かけました。樹木医の柿田さん、佐藤さん、楨野さんも一緒です。2010年は残暑が厳しかったため、9月下旬でも全く真夏のような暑さでした。三瓶山の西側に回ると、マツ枯れがさらに広がっています。ナラ枯れも海側から入って高いところまで達していました。島根県でも、今年からいよいよ本格的なナラ枯れが始まるという印象です。

幸い「定め松」はかなり元気になり、下枝の芽がみんな上を向いて立ちあがり始めました。芽の動きはまだ小さいが、折ってみるとわずかに樹脂が出ます。昨年まで葉の根元が黄色くなっていましたが、今年はそれが消えて鮮やかな緑に変わりました。樹齢450年の老木ですから反応が鈍く、処理をしてから3年たって、ようやく回復の兆しが見えてきました。雪折れのために枝数が減りましたが、地下部とのバランスを考えると、その方が却って良かったのかもしれない。それにしても、良く頑張ってくれたものと感謝しています。

途中、太田市にある大きな神社のマツを見ましたが、そこで面白い話を聞きました。樹齢250年になるアカマツとクロマツが根元でつながり、「相生の松」として大事に守られていたそうです。雌松、アカマツがすくとまっすぐ立ち、雄松、クロマツが遠慮がちに斜めに伸びていました。ところが、数年前アカマツがマツノザイセンチュウ病で枯れたそうです。クロマツは抑えるものがなくなったので茂りすぎ、重さで折れるのではないかと心配しているという話です。どうやら、相手がなくなった途端、元気になってのびのびと育ちだしたようでした。普通は旦那がなくなると、元気になる奥さんが多いのですが、この松はどうやら尻に敷かれていたせいか、一人暮らしを満喫しているように見えました。ごく近くに若い松が育っているのも意味深長です。気になる向きは一度訪ねてみてください。

9月28, 29日 炭

西オーストラリアのノートルダム大学教授のシド・シャイさんが京都に来るというので、沖森泰行さんと一緒にお相手をする事になりました。シャイさんは10数年前に菌根研究者のマラチャックさんの紹介で会って以来の知り合いです。政府の役人を退いてからは、西オーストラリアで農地の地下から湧き出る塩害を防ぐために植林を進め、農業に炭を使うことに熱中しているヤリ手です。最近炭がコムギの成長や早害対策に役立つことが分かり、炭の製造方法について知りたいとあってこられました。お世話は環境総合テクノスの沖森さんで、亀岡の立命館の試験地などを案内しました。立命館大学で柴田晃さん

達のお世話になり、衣笠キャンパスで学生に講義をしてもらい好評でした。近くの龍安寺の石庭も拝観しましたが、まだ暑さが残り、汗をかくほどでした。

9月30日 京都のナラ枯れ

6月に修学院の近くにあるタケダの薬草園を見学に行った時、すでにコナラやシイの葉が黄色くなり、ナラ枯れの予兆が見てとれました。その後、8月に京大を訪れた時にも吉田山のコナラが茶色になっていました。以前に福井県などでとった写真が古くなり、フィルムだったので、デジカメで撮り直しに出かけました。京都駅からみると、東山が点々と茶色に変わっています。伏見から東福寺の山、南禅寺から大文字山にかけて特にひどく、北山の方まで枯れが広がっていました。

まず、以前に暮らしていた銀閣寺の門前に行ってみました。参道からも枯れた木が見えます。門前は修学旅行客や観光客でにぎわっていましたが、木が枯れているのに、誰も気付いている様子がありません。坂を登りきったところで左に入り、朝鮮人学校の校庭へ出ると、すぐ近くの木がひどく枯れています。大きな木から、まだ若いものまで完全な立ち枯れです。虫が入った跡があり、すべてカシノナガキクイムシにやられていました。

この山を越えた所に一人暮らしの姉がいるので、見舞いがてら立ち寄りしてみました。昔は子供の声が聞こえた団地に空き家が増えています。人間の代わりにイノシシの親子やサル的一家、シカの群れなどが集まり、庭にまで入ってくるといいます。私が住んでいる宇治の住宅団地でさえ、タヌキが徘徊するほどで、旦那寺の興聖寺の墓地は、ミミズを探すのか、イノシシの畑になっています。京都市でも山の近くは今や動物園のようになり、人間が檻の中に入っているような有様です。

その後、北郊にある京都府立植物園に行きましたが、ここでもナラ枯れが始まっています。シイの幹にビニールシートを巻いたり、薬を塗ったりしていますが、その上から虫が穴をあけて侵入しているので、気の毒ですが、効果は期待できません。木の先端の葉が小さくなり、枯れた枝も見えるので、おそらく、今年はかなり枯れると思います。

ナラ枯れには手の打ちようがありませんが、今NPO法人「森びと」を中心にして、根の周りに炭の粉を撒いてみようという試みが始まっています。理事の宮下正次さんが新潟や佐渡のナラに炭を使って効果があると報告されました。その新聞記事を見て、各地でやってみようということになり、この間天王山の山でサントリーや地元の人たちと一緒に炭を埋めてみました。私も、今あちこちに少量ずつ埋めて根の反応を見ています。

と、ここまで書いて庭へ出てみました。イチジク、ツバキ、サザンカではいずれも細かい根が良く出ています。少し肥料をやると良いと伊藤武さんにききましたので、腐葉土堆肥を加えて表面を土で覆っておきました。ナラは宇治にある運動公園で試みしたので、暖かくなったら、行ってみようと思っています。ここもコナラが衰弱し、虫が入っており、ナラ枯れが京都から次第に南下しています。今年はシイも枯れることでしょう。

いずれ、お知らせしますが、今年の8月末に京都で日本の森林を守ろうという「森び

と」の会が開かれ、テーマはナラ枯れ特集になると思われます。見学先には事欠かないかもしれませんが、京都がナラ枯れで有名になるというのも悲しい話です。

10月9、10日 名取市閑上浜

この日は雨もよいでしたが、東京駅で日経新聞の清水正巳さんと落ち合って宮城県名取市の閑上浜へ出かけました。というのは、私のことを土曜日夕刊の「シニア記者が作る心のページ」で取り上げたいというご希望があったからです。6日に京都で会い、現場を知るために宮城県へ行くことになりました。清水さんは、塩谷さんともども最近まで科学部の論説委員で、いろいろお世話になっていました。この記事は、奇しくも私の73回目の誕生日、10月30日の夕刊に、恥ずかしいほどの大きな顔写真入りで掲載されました。

先にも紹介したと思いますが、かつての閑上浜は典型的な白砂青松で、今でも学生のころに撮った写真を使わせてもらっているほどのところですが。しかし、ここにもマツ枯れが広がり、衰弱が始まっています。そこで、何とかして守ろうと、地元の人たちが大橋信彦さんを世話人にして数年前から「ゆりりん会」を立ち上げ、マツ林の清掃を始めました。最近では市や県が関心を示して手伝ってくださるようになり、大いに盛り上がっています。その落ち葉かきの奉仕活動が10日に行われることになっていました。

名取駅で大橋さんに出迎えてもらい、主だった人に集まっていたいでマツ林の手入れや菌根について説明させてもらいました。というのは、この前出かけた時にパワポインターが使えず、写真を見せてもらうことができなかつたからです。宇治の植物園で採っていたキノコなども見てもらい、胞子の採り方や菌根の見方を県の林業センター研究員の今埜さん達に伝授しました。

また、インドネシアでJICAのプロジェクトに参加していた時、現地チームのリーダーだった島崎さんに久しぶりにお会いすることができました。今は仙台森林管理署の署長さんです。国有林の閑上浜も管理対象になっているので、国有林を手入れしたり、炭を焼いたりする場合は許可をもらわなければなりません。地元にとっては、ちょうどいいチャンスになりました。

夜は美味しい魚と地元のお酒をいただき、大橋さんをはじめ、菌根やキノコの研究を県でしておられた玉田さんや七ヶ宿から駆け付けた佐藤さん、清水さんなどと歓談しました。大橋さんはマツ林のほかに海岸に生えるハマボウフウの保護活動も手掛けておられます。ハマボウフウというのは、刺身のつまぐらいのものと思っていたら、この地方では根を食べるのだそうです。そのため、乱獲が続き、次第に減ったのでしょう。食べる習慣がない兵庫県の海岸で、大きな群落を見たことありますが、あまり教えない方がいいようです。

白いカリフラワーのような花を咲かせ、種子で繁殖するので、条件の良いところでは群落をつくります。根は極めて深く、真っ白で軟らかく、生で食べると独特の風味があります。風邪薬にもなり、いためて食べるということでした。大橋さん達は自然のものをと

るのは許されないので、栽培しているそうです。なお、全国組織があるそうですから、興味のある方は連絡してみてください。n-ohashi@kjf.biglobe.ne.jp

10日の朝はまだ道が濡れていて、雨が心配だったので、予定変更になり、地域センターで私と今埜さんが話をすることになりました。しかし、通知が遅れたのか、早くから海岸に人が集っています。とりあえず行くことになって、松林の中で皆さんに作業の仕方やキノコの大切さについて話をしました。老人から子供、中学生なども交じって50人ほどになり、お昼は美味しいおにぎりとお汁をたっぷりいただきました。集会が終わるころにはすっかり晴れ上がり、陽がさしていました。例によって松林の仕事は天気恵まれています。清水さんとは仙台で別れて、のんびりと帰路につきました。

10月19, 20日

朝8時半、栗栖さんに迎えに来てもらって、綾部で伊藤さんと落合い、いつものように丹後半島に向かいました。1時前に着くと、見慣れた顔や初めての顔がそろっています。みんな樹木匠さんで、「宗實スクール」のメンバーです。9月に「緑の地球ネットワーク」の活動に参加してもらって大同へ行った時、世話人の宗實さんの発案で、もっとキノコや菌根のことを勉強しようということになったそうです。それで伊藤さん、栗栖さん、私の三人が指導員に招かれたというわけでした。道理で栗栖さんの車のトランクには顕微鏡や実験器具など、あらゆるものが詰め込まれていました。

早速、京大院生の大原君が天然下種したクロマツの若い林を手入れしている場所の周辺でキノコ採りを始めました。2010年はキノコが大発生したので、出ているかと期待していましたが、それほどでもありませんでした。しかし、丹後きのこクラブの人も加わって、20人ほどで探したおかげで、ヌメリイグチ、チチアワタケ、アマタケ、ハツタケなどの菌根菌が結構採れました。私はもっぱら食べられるキノコ専門です。しかし、山のものに比べて砂丘のキノコはよほど良く洗わないと、砂を噛むので、その晩食べたハツタケとアマタケを入れたトン汁は底まで飲まないようにしました。

伊藤さんの指導で、集めたキノコのヒダを引っぺがします。アマタケ属のキノコのヒダは管孔になっており、スプーンなどでかきとると簡単にはがれます。子実体の組織が混じると雑菌が繁殖しやすいので、胞子がついているヒダだけをとりまします。これに水を加えてミキサーで砕き、ドロドロの液体にして原液とします。水の割合や胞子数については栗栖さんに聞いてください。この原液を冷蔵、凍結保存し、苗を育てるときに薄めて散布します。胞子は10ミクロンもないので、かなり薄めても十分効果があります。水に薄めてペットボトルに入れ、陽の光に透かして見ると、先が見える程度で十分です。多分、これで1ミリリットルあたり10万個以上の胞子が入っていると思います。

宿の部屋では、栗栖さんが実態顕微鏡をセットして、菌根の形態観察を始めました。最近のクロマツの根は黒く腐っており、健全な菌根が見えなくなっています。それでも菌糸に包まれた根の先端が見えて、みんな大満足でした。ついでに、アーバスキュラー菌根

も見ました。これが本当に実務に役にたつ実習なのです。

翌日は午前中に大原君の試験地を見て、測定や観察の要点を相談しました。10時半に終り、箱石浜に向かいました。伊藤さんにクロマツ林の再生方法を説明してもらいました。乾燥が激しかったせいもあって、2010年は依然として枯れるものが多く50本を伐採することになりました。丹後きのこクラブの中邑さんと相談して、11月27、28日に作業することに決めました。毎年、全滅しないことを祈りながら、間伐を兼ねて枯れるマツを伐採・焼却処分しています。それにしても、マツ枯れは、まるでペストのような、実にひどい伝染病です。

1時半から大宮市の農林整備課の野村さんの努力下、京丹後市の「森資源活用検討会」が開かれることになり、大宮庁舎へ出かけました。伊藤さんや立命館大学の柴田さんも加わって、農林一体化を図った産業おこしを考えようという集まりです。地元の企業や農業団体など、多くのメンバーが集まり、とにかく手探りの活動が始まりました。

会長にされて戸惑いましたが、野村さんは大阪工大土木学科の出身ですから、その期待にこたえなければなりません。林業と農業、商工業、環境教育をつなげるプロジェクトが立ち上がるとよいのですが、前途多難です。ここでは御案内の通り、3月26、27日に箱石浜で海岸林の再生を試みる活動が始まります。これも「森資源活用検討会」の活動の一環です。会議が終わり、3時半に出て栗栖さんの車に乗せてもらい、途中魚や野菜などを買って帰りました。

この辺でいったん休憩に入ります。12月から3月にかけてまた忙しくなってくるようです。